

2024年1月14日 礼拝説教要旨

ハイデルベルク信仰問答講解Ⅱ30「残る弱さも覆われて」

出エジプト12：21～23、ヘブライ10：11～18

問80 主の晩餐と教皇のミサとの違いは何ですか。

答 主の晩餐がわたしたちに証することは、イエス・キリスト御自身がただ一度十字架上で成就してくださったその唯一の犠牲によって、わたしたちが自分のすべての罪の完全な赦しをいただいている、ということ。また、わたしたちが聖霊によってキリストに接ぎ木されている、ということです。この方は、今そのまことの体と共に天の御父の右におられ、そこで礼拝されることを望んでおられます。しかし、ミサが教えることは、今も日ごとに司祭たちによってキリストが彼らのために献げられなければ、生きている者も死んだ者もキリストの苦難による罪の赦しをいただいていない、ということ。また、キリストはパンとブドウ酒の形のもとに肉体的に臨在されるので、そこにおいて礼拝されなければならない、ということです。このようにミサは、根本的には、イエス・キリストの唯一の犠牲と苦難を否定しており、呪われるべき偶像礼拝にほかなりません。

「教皇のミサ」とはカトリック教会のミサ、わたしたちの教会で言えば「聖餐」のことです。ここでは教皇のミサと聖餐を比較して違いを述べています。前回の説教でカトリック教会の「人体説」の話をしました。パンの実体がイエスさまの体に変化する。ぶどう酒の実体がイエスさまの血に変化する。そうすると、どうしてもパンとぶどう酒を神聖なものとして崇めることとなります。「キリストはパンとブドウ酒の形のもとに肉体的に臨在されるので、そこにおいて礼拝されなければならない」と言います。それゆえミサは「呪われるべき偶像礼拝」だと厳しく批判しています。

プロテスタント教会では「この方は、今まことの体と共に天の御父の右におられ、そこで礼拝されることを望んでおられます」とあるように、天に昇られ、父なる神さまの右に座しておられるイエスさまを礼拝しています。この地上に、パンの中にイエスさまはおられるわけではありません。そのように見えるもの、この地上の中にイエスさまを押し込める。そこに限定してしまうと、それはわたしたちの信仰を狭い、世俗的なものにしてしまうでしょう。しかし救いはそのようなところに収まるものではありません。わたしたちの存在を天、神さまのご支配へとつなぐものです。「あなたがたは、キリストと共に復活させられたのですから、上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます」（コロサイ3：1）天におられるイエスさまを礼拝するからこそ、地上のことではなく、むしろそこから自由にされて、天、神さまのご支配を生きることができるようになります。そこに信仰による自由があります。それは神さまのご支配を生きる自由と言ったらよいでしょう。

ルターの書いた『キリスト者の自由』という本があります。その冒頭に「キリスト者はすべてのものの上に立つ自由な主人であって、だれにも服しない。キリスト者はすべてのものに仕える僕であって、だれにでも服する」という有名な言葉があります。神さまのご支配に生きることは、この地上の様々な支配から自由になることです。しかしだからといって自由奔放に自分勝手に生きるというのではない。強いられてではなく、仕方なくでもなく、自分が主人になって、喜んで、主体的に誰かのために仕えることができる。強いられて愛するとか、無理をして奉仕するというのはおかしな話です。けれども世の中はそういう愛し方、義務ですることばかりではないでしょうか。誰からも強いられることなく、心から喜んで、誰かのために何かをする。それは素晴らしいことであり、そのことを可能にするのが信仰です。

もう一つ、ここで強調されている点は、イエスさまの十字架の出来事に集中するという事です。「イエス・キリスト御自身がただ一度十字架上で成就してくださったその唯一の犠牲によって、わたしたちが自分のすべての罪の完全な赦しをいただいている」とあります。そこに唯一無二の、完全な救いがある。一回限りのイエスさまの十字架の出来事が、二千年の時を経て、今を生きるわたしたちに効力を持っているのです。「ただ一度」「唯一の犠牲」という言葉が繰り返されます。それですでに完全なのです。何も付け加えることはありません。

それに対してカトリック教会の聖餐の考え方によると「ミサが教えることは、今も日ごとに司祭たちによってキリストが彼らのために献げられなければ、生きている者も死んだ者もキリストの苦難による罪の赦しをいただいていない」つまりカトリック教会では、パンと杯にイエスさまの体と血を見ますから、ミサそのものに救いの効力があるという誤解を与えます。ミサの度にイエスさまが肉を裂き、血を流すことによって罪の赦しがなされているような捉え方をしてしまうのです。そこでの大きな問題は、二千年前のイエスさまの十字架の出来事、それによる罪の贖い、赦しが見えなくなってしまうことです。イエスさまの十字架の出来事よりも、司祭の行うミサに心が向いてしまう。それは本末転倒と言わなければなりません。

聖餐は、どこまでもイエスさまの十字架の救いの出来事を示すものです。そこにわたしたちの唯一の救いがあります。しかしわたしたちは、それ以外のところに、例えば、この世の中に、あるいは自分自身の中に救いの根拠を見出すようなことをしてしまう。それは大きな間違いです。そのことが次の問答に言い表されています。

問81 どのような人が、主の食卓に来るべきですか。

答 自分の罪のために自己を嫌悪しながらも、キリストの苦難と死によってそれらが赦され、残る弱さも覆われることをなおも信じ、さらにまた、よりいっそう自分の信仰が強められ、自分の生活が正されることを切に求める人たちです。しかし、悔い改めない者や偽善者たちは、自分自身に対する裁きを飲み食いしているのです。

「悔い改めない者や偽善者たち」とあります。わたしたちは聖餐に与る時に、自分自身の罪を自覚し、悔い改めているかどうか、自らに問いかけなければなりません。むしろ自分は正しい、ふさわしいと思っているところがあるならば、わたしたちこそ悔い改めない者であり、偽善者に他ならないのです。

わたしたちは誰一人として神さまの前に胸を張って生きられる人はいません。「残る弱さも覆われる」とあります。信仰者と言えども、まだまだ弱く罪を重ね続けるものです。弱さが残るのです。でもその残る弱さもイエスさまの十字架の赦しの中に覆われます。イエスさまの十字架の苦しみはそこまで及ぶのです。わたしを追いかけてきて、その罪を覆ってくださる。そのことを信じる時に、恵みに甘えて、自分はこのままでいいとは決して思わないでしょう。この恵みに応えて生きよう、そのような真実な悔い改めが起こされるに違いありません。

天の父よ。自分で自分が救える、自分が正しい、自分がふさわしい、そのように考えて、イエスさまの十字架の御業を軽んじてしまう愚かなわたしたちです。どうぞ、1 どこまでもイエスさまの十字架の救いに心向けることができますように。そこにわたしたちの唯一無二の、これ以上ない完全な救いがあることを覚えさせてください。主の御名によって祈ります。アーメン。